

狐は内心喜んだ。ずうつと前からこのつぶを食ってやろうとねらっていたが取れなかった。今日こそあの大きな、うまそうなつぶが食べられるとうれしくってしようがなかった。狐は自慢した「おれのしっぽはな、年中引きずって飛んで歩いて、毛一本すり切れることはねえんだから、水につかたつてちっとも何ともねえんだない」といった。つぶはまたいった「そんなじも、この池の水の中にしっぽを入れて、まるきしぬらしたら、なんぼ狐どんでも重かんべいなん」。これを聞いて狐は、なあにそだことは平ちやらだ、これこの通り」と狐はしっぽを池の中に尻がぬれるほど浸した。つぶは待ってましたと、狐のしっぽの一番先の毛にぴたりと吸いついて、かたくかたくふたをした。狐はそんなことは知らない一、二、三でかけ出した。野も山も川も登りも下り坂も目に入らない。今日こそ、あの大きなつぶのうまい肉が食えると、目の前にぶら下がったようなつぶの肉の味を思い出しながら走り走った。一晚に軽く十里は歩くといわれる狐の足は早い。決勝ラインの山のでつちよねに着いた。

狐「つぶの野郎はまだまだ半分も来てなかんべえ」と勢いよく後ろを振り返った。その時つぶは、しっぽのはずみを利用して後の方に飛んだので、狐より一米位先になった。狐は、つぶがおくれてきたらすぐに食うことばかり考えていた。その時、後ろからつぶが「狐どんおそかったなあ、おれはおめえを食ってもいいべ」と話しかけたから狐はびっくり仰天。いつも智者者ぶり、ごう慢ちきな顔を土につけて、ひらあやまりにあやまったとき。ほんじゃからなあ、ずるい考えただけでは、うまい物は食えねえんだなあ。